

〔中国の工芸展によせて〕

唾壺の形

—大和文華館所蔵

青磁唾壺の位置—

長い中国の歴史の中では技巧を凝らした様々な造形の陶磁器が造られています。今回は非常にシンプルな形の唾壺を取り上げたいと思います。

「唾壺」とは、文字通り唾や痰を吐き入れる為の壺です。日本に渡ったものは調度品として用いられ本来の使用方法はほとんどされませんでしたが、現在の携帯灰皿のようなエチケット用品の一種といえるでしょうか。中国では長い時代に渡って用いられ、墳墓の壁画にもしばしば描かれています(図1:宣化下八里張世古墓、遼・天慶七年(1117))。さらに、唐代に広く行われた交易により、日本からも唾壺は出土しています(図2:「青磁唾壺(残欠)」奈良市平城京跡出土、越窯、高8.8cm)。この出土品は浙江省に位置する越窯青磁がもたらされたもので、浙江省博物館蔵品や日本への輸出口であった寧波の和義路からの出土品にも同じ器形の唾壺を見ることができます。

大和文華館に所蔵される「青磁唾壺」(図3)は、三角錐に広がる漏斗状の口部が特徴で、やや縦に押し潰したような丸い胴部に低い高台が付いています。口は直線上に広がり口縁部で内側に折れ曲がり、口縁外部が一段くびれています。高さ20.0cm、口径は24.3cmで胴径14.0cmよりも大きく広がっています。口部と胴部を継ぎ、また胴部のほぼ中央に胴継ぎが認められます。特に胴部には横位の整形痕が残されています。

胎土は暗灰褐色できめ細かく、器形全体に薄く青磁釉が施され、高台内部にも施釉し、足裏にも付着します。釉色は灰褐色に近い緑色を呈します。足裏には目跡が六カ所確認できます。

紀年墓出土の唾壺を中心に形状を概観すると、七世紀後半までは小型の盤口瓶状の器形(図4:河北省崔昂墓出土、天統二年(588)、高12.7cm、口径9.2cm)及び口縁が広がらずに

緩くくびれる器形(図5(断面図):四川省万県唐墓出土、永徽元年(654)、高7.5cm、口径4cm)が見られますが、九世紀前半には、口部が皿状に広がる大きな器形(図6(断面図):河南省偃師杏園村鄭紹方墓出土、元和九年(814)、高8.2cm、口径13.3cm、底径7.8cm)が出てきます。ここに認められるように、初唐から中唐にかけての八世紀後半に大きく口の広がる唾壺が作られるようになったと見られています。これまでの唾壺は胴部が下膨れでやや下方に重心を置いた器形が共通しています。唐末以降の唾壺を見ると、上下の比重が反転し、胴部は球形に口部は三角錐状を呈し(図7(断面図):河南省偃師杏園村盧州參軍李存墓出土、会昌五年(845)、高10cm、口径14.5cm、底径6.6cm)、高台が高くなり、胴と口部それぞれの形の特徴が明瞭になり接続部が強調されていきます(図8:河北省張匡正墓出土、清寧四年(1058)~大安九年(1093)、口径16.5cm)。胴部は球が押しつぶされたような形ですが、重心は胴の中央に移っています。

前掲の図2の唾壺は口部がほとんど欠失していますが図7の器形に最も近く、これらと文華館蔵品を比較すると、図2・7ともに文華館蔵品より一回り小さくなります。低い足から球形の胴部へとつながる部分は同じですが、胴部の形はやや下方に重心を置き、口が緩い曲線によって低く立ち上がる点で、球形の胴部に口部が直線的に広がる文華館蔵品とは異なります。

最も特徴的なのは口縁の形で、文華館蔵品の口縁部のように内湾し一段くびれる形状は、越窯青磁に類品はなく、浙江省博物館蔵品を始めとして、器形に沿ってゆるやかにすばまっています。文華館蔵品に近い口縁部は図8に見られますが、高い高台や口部と胴部の繋ぎ部分を強調する点で明らかに造形意識が異なっているといえます。段はありませんが口縁が内湾した唾壺は五代のものに見られるようになります。しかし、文華館蔵品は低い足や口と胴部の繋ぎ方から、五代までは下からないと見られます。

浙江省慈溪県上林湖畔に位置する晩唐時代の馬溪灘越州窯址から出土した唾壺残欠(図9(断面図))は口部の上半が欠失していますが、押しつぶされたような球形の胴部に低い足が付き、口部の付け根と胴部中程で胴継ぎされています。口縁部の形状は定かではありませんが、口と胴から底部にかけての形状や胴継ぎの位置は文華館蔵品と大変よく類似しています。これによって文華館蔵品の焼造地を特定することはできませんが、時代は晩唐、九世紀後半に絞られるのではないかと考えられます。口縁部の形状は新しい要素である可能性も残りますが、今後、窯を特定する時に有用な特徴といえます。

シンプルな形の中に、素朴さと重厚さを併せ持つ本作品については、もう少し考えなければならぬ要素が残されています。

(図版は次の本より転載させていただきました。図1:河北省文物研究所編『河北古代墓葬壁画』文物出版社、2000年。図2:『日本出土の中国陶磁』東京国立博物館、1978年。図4:『文物』1973年第11期。図5:『考古学報』1980年第4期。

図6:『考古』1986年第5期。図7:『考古』1984年第10期。図8:劉濤『宋遼金紀年瓷器』文物出版社、2004年。図9:林士民『青瓷与越窯』上海古籍出版社、1999年) (瀧朝子)

図4



図5

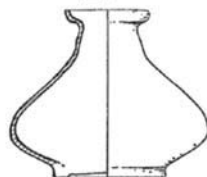


図6

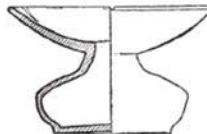


図7

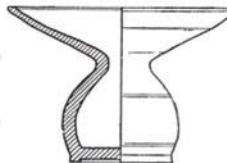


図8



図9

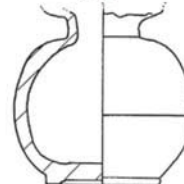


図1



図2



図3 大和文華館蔵品

